

第5回 日韓関係60年の歩みとこれからの展望

2025年は第二次世界大戦の終結(1945年)、すなわち韓国が日本の植民地から解き放たれてから80年目の節目に当たるが、それと同時に日韓国交正常化(1965年)から60年目の節目でもあった。この両者はたまたま20年空いているのではない。韓国が日本から解放されてから国交が回復するまで20年の歳月を要したのである。

そして、その後の60年間の両国の歩みはどうであったか。日本がOECDに加盟したのは、国交正常化とほぼ同時期の1964年のことである。その後、世界を代表する経済大国となり、日本の三菱地所がアメリカのロックフェラーセンターの運営会社を買収するまでになった。しかし、1995年にはその運営会社は経営破綻。日本の跳躍の象徴ただだけに、一転して日本の凋落の象徴にもなってしまった。そしてその後、30年が経過した今日に至るも日本は停滞を続け、「失われた〇〇年」から抜け出せずにいる。

一方、国交正常化した時の韓国は北朝鮮にさえ見劣りする程度の経済力しか持ち合わせていなかったが、その後「漢江の奇跡」により著しい経済成長を遂げ、1996年にOECDに加盟、先進国入りを果たした。したがって、60年の歳月は、前半30年の途上国韓国-経済大国日本という両国の関係性から、後半30年の新生先進国韓国-停滞国日本という関係性へと大きく変貌を遂げさせた。こういった両国の関係性の変化は経済分野だけにとどまらず、政治分野にも影響を及ぼしている。

そして、2023年にはついに一人当たりGDPで日本は韓国に抜かれ、日韓関係は新たな局面を迎えるとしている。これからの日韓関係はどこに向かおうとしているのか、その展望を考えていきたい。



講師:生駒 智一(いこま ともかず)

立命館大学国際関係学部講師

専門は比較政治学、韓国政治、複雑系。『ろうそくデモを越えて—韓国社会はどこに行くのか』(共著共訳)(東方出版、2009年)、『韓国の連合政治—「接着剤モデル」からみる金鍾泌の生存戦略』(文理閣、2021年)、『現代韓国の軌跡—政治・社会・国際関係』(共編)(晃洋書房、2025年)など。

日時

2026年2月7日(土) 13:00~15:00

※終了後、ご自由に立命館大学国際平和ミュージアムをご見学いただけます。

会場

立命館大学 衣笠キャンパス

平井嘉一郎記念図書館 カンファレンスルーム

※市バス立命館大学前下車 正門を入って徒歩3分、図書館入ってすぐ左です。



参加費: 無料(ただし資料代500円※除学生)	申込: 不要
問合先: 080-9079-7195 (事務局:桂良太郎)	
WEB: GN21ネット(https://www.gn21.net)	